

はじめに

本書は、初版以来、学習・受験の好伴侶（はべり）として高校生諸君に愛用されてきた『要説 伊勢物語』『要説 更級日記』を全面的に改めたもので、新版の特色は次の諸点である。

- ① 判型・文字の大型化 読みやすくするために、大判（A5判）に改め、文字を大きくした。
- ② 2色刷りの採用 学習上の重要箇所などが視覚的に区別できるようにした。
- ③ 教科書の本文 現在使用されている主要教科書に収録された章段を増補するとともに、必読の文章を網羅するよう努めた。
- ④ 教科書の設問 教科書の研究課題・設問の解答・解法を、「語釈と文法」「重要語」「文法の要点」「研究」などの欄に、可能な限り収録した。

凡 例

一、本文は主として「日本古典文学全集」によった。ただし、他の良書の本文を参考にして、一部改めたところもある。また、本文を読みやすくするために、句読点・引用符号・漢字・かなづかいを適宜改め、また、できるだけ多く読みがなをつけるとともに、旧かなづかいの部分の左傍には、かたかなで読み方を示した。

二、解説は、その章の内容を簡潔にまとめたものであるが、必要に応じて、解釈・鑑賞の手引きとなるようなことからをも加えた。

三、口訳は原文に即してわかりやすい訳文を作ることにとめた。原文になく訳文に補った箇所には、（ ）をつけて明

示し、原文と訳文を比較対照する際の便をはかった。
四、**読解の要点**には、原文を読み解くうえのヒント・手引きになるような語句・語法・文脈上の要点を解説した。古文の実力をつけるには、いきなり訳文を読むのではなく、できるだけ自分の力で考えてみるのがたいせつである。それゆえ、この「読解の要点」を手がかりとして実力を養成されることを切望する。

五、**語釈と文法**は、平易なことばで、しかもできるだけ詳しく説くことに努めた。抽出した語句には、必要があればまず「」の欄内に品詞名を示して、次に語義を説いた。重要語や、一語で多くの意味を持つ語については、そのすべの意味・用法をあげて古文解釈の基礎知識が身につくよう心がけた。また、特に重要な語句は大きな文字にして、

で囲み、注意をうながしてある。

六、**重要語・文法の要点**では、文法的に検討しておかなければならないような語句や、解釈上とくに注意しなければならぬ語句をとりあげて説明した。また、文法的な基礎事項や、広く応用のきく事項のまとめはこの欄で扱い、十分な解説を加えることにした。

七、右の五、六の説明にあたっては**重要語参照****文法参照**等の指示をして、相互の関連をはかり、できるだけ学習上の便宜をはかるよう意を用いた。

八、**鑑賞**の欄を、重要な章ごとに設け、文学作品としての味わい方を深めるようにした。鑑賞は、特に原文に即して具體的に述べるよう心がけるとともに、作品の背景として重要な事項をも詳しく説いた。

九、**研究問題**とその解答を、重要な章に添えた。問題は入試問題中から厳選するとともに、新作問題をも加えたが、これによって各自の実力をテストされたい。

本書の作成に当たっては、永橋 博先生に多大のご尽力をいただきました。

目次

解説……………ハ

伊勢物語

- 1 初冠 (一段)……………一八
- 2 五条の女 (四段)……………三
- 3 通ひ路の関守 (五段)……………六
- 4 芥川の女 (六段)……………三
- 5 東下り (九段)……………四
- 【一】昔、男ありけり。その男、身を要なき……………四
- 【二】行き行きて、駿河の国に至りぬ……………四
- 【三】なほ行き行きて、武蔵の国と下総の国……………四

6 あねはの松 (一段)……………三

7 年にまれなる人 (一段)……………三
年ごろおとづれざりける人の、桜の盛りに……………三

8 筒井筒 (二段)……………三

【一】昔、田舎わたらひしける人の子ども……………三
【二】さて、年ごろ経るほどに、女、親なく……………三
【三】まれまれの高安に来てみれば……………三

9 梓弓 (二段)……………三

10 すける物思ひ (四〇段)……………三

昔、若き男、けしうはあらぬ女を思ひけり……………三

11 武蔵野の心 (四一段)……………三

昔、女はらから二人ありけり。一人は……………三

12 行く螢 (四五段)……………三

昔、男ありけり。人のむすめのかしづく……………三

13 うるはしき友〔四六段〕……………六

14 昔、男、いとうるはしき友ありけり。……………六
 狩の使〔六九段〕……………六

15 昔、男ありけり。その男、伊勢の国に……………六
 つとめて、いぶかしけれど、わが人を……………六
 渚の院〔八二段〕……………六

16 昔、惟喬の親王と申す皇子おはしまし……………六
 御供なる人、酒を持たせて野より……………六
 小野の雪〔八三段〕……………六

17 昔、水無瀬に通ひたまひし惟喬の親王、例の、……………六
 さらぬ別れ〔八四段〕……………六

18 昔、男ありけり。身はいやしなから、……………六
 あやしき藤の花〔一〇一段〕……………六

19 昔、左兵衛の督なりける在原行平といふ……………六
 身を知る雨〔一〇七段〕……………六

20 昔、あてなる男ありけり。その男のもと……………六
 つひに行く道〔一二五段〕……………六

昔、男わづらひて、心地死ぬべくおぼえ……………六

更級日記

1 門出……………一
 〔一〕 あづま路の道の果てよりも、……………一
 〔二〕 門出したる所は、めぐりなどもなくて、……………一
 〔三〕 十七日のつとめてたつ。昔、下総の……………一
 竹芝寺……………一

2 今、今は武蔵の国になりぬ。ことに……………一
 帝・后、皇女失せたまひぬと……………一
 梅の立ち枝……………一

3 広々と荒れたる所の、過ぎ来つる……………一
 継母なりし人は、宮仕へせしが……………一
 二つの死別……………一

4 その春、世の中いみじう騒がしうて、……………一
 物語……………一

5 かくのみ思ひくんじたるを、……………一
 いと口惜しく思ひ嘆かるるに、……………一
 はしるはしるわづかに見つつ、……………一

6 大納言の姫君……………一
 〔一〕 花の咲き散る折ごとに、乳母……………一
 〔二〕 姉おとの中につとまとはれて、……………一
 父の赴任……………一

7 親となりなば、いみじうやむごとなく、……………一
 七月十三日に下る。五日かねては、……………一
 東より人来たり。「神拝といふ……………一
 鏡のかけ……………一
 母一尺の鏡を鑄させて、え率て参らぬかはり……………一
 宮仕へ……………一

9 十月になりて、京にうつるふ。母、……………一
 まづ一夜参る。菊の濃く淡き八つ……………一
 師走になりて、また参る。局して、……………一
 十日ばかりありてまかでたれば、……………一
 石山詣……………一

10 今、昔のよしなし心も……………一
 関寺のいかめしう造られたるを……………一
 初瀬詣……………一

11 そのかへる年の十月二十五日、……………一

〔一〕 「道、顕証ならぬ先に。」と、……………一
 〔二〕 つとめて、そこを立ちて、東大寺に……………一
 〔三〕 暁、夜深く出でて、えとまらねば、……………一
 夫の死……………一

12 世の中に、とにかくに心のみ尽くすに、……………一
 二十七日に下るに、男なるは……………一
 九月二十五日よりわづらひ出でて、……………一
 昔より、よしなき物語・歌のことを……………一
 後の頼み……………一

〔一〕 さすがに命は憂きにも絶えず……………一
 〔二〕 甥どもなど、一所にて朝夕みるに、……………一
 付録……………一
 語句索引……………一
 近畿付近地図……………一
 更級日記参考図(東海道)……………一

伊勢物語

1 初冠〔一段〕

解説

元服したばかりの若者が、田都奈良の春日の里に狩りに行き、さびれた田都にはふさわしくなくらいの美しい姉妹をかいま見て心を動かす、自分の着ていた狩衣の裾を切って歌を書いておく。

昔、男、初冠して、奈良の都春日の里に、しるよしして狩に往にけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男かいま見てけり。おもほえず、ふるさとにいとほしたなくてありければ、心地惑ひにけり。男の、着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、信夫摺りの狩衣をなむ着たりける。

春日野の若紫の摺り衣しのぶの乱れ限り知られず

となむ、追ひつきて言ひやりける。ついでおもしるきことともや思ひけむ。

昔、ある男が、元服して、奈良の都の春日の里に、領地があった縁故で、鷹狩りに出かけた。その里に、たいそう上品で美しい姉妹が住んでいた。(その姉妹を、)この男はものの隙間からちらとのぞき見てしまった。意外にも、(「こんなさびれた」)田都には全く不似合いな様子でいたので、(男は)心が動揺してしまった。(そこで)男は、(自分の)着ていた狩衣の裾を切って、(それに添えて)歌を書いて贈った。その男は、しのぶ摺りの狩衣を着ていたのであった。

春日野の若い紫草で摺り染めにしたこの狩衣の忍草の模様が乱れているように、(美しいあなたを)私をお見かけしてから)ひそかにあなたがたを恋うる私の心は限りもなく乱れていることです。

と、とっさに詠んでやった。(男が)こんなことをしたの(は)その場になかったおもしろいこと、とても思ったのであろうか。(「いったい、この歌は、」)

みちのくのしのぶもぢ摺り誰ゆゑに乱れそめにしわれならなくに
といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

陸奥のしのぶもぢ摺り(の乱れ模様)のように、私の心が乱れ始めたのは、いったいどなたのせいでしょうか、私のせいではありませんのに、(ただあなた一人のためなのです)。
という古歌の気持ち(を踏まえたものなの)である。昔の人は、このように熱烈な風流をしたものである。

読解の要

まず文章の構造の面からみて、「昔、男、初冠して……言ひやりける」までが風流な著者についての話で、「ついでおもしるきことともや思ひけむ」以下は、物語作者の、男の心中や行為に対する推測と説明であることを意識して読まなければならぬ。語のすじそのものは平明であるが、解釈上注意すべき古語(例えば、「初冠」「しるよし」「なまめく」「はしたなし」「ついで」「いちはやし」「みやび」など)が多いから、その意味を正確に理解して読むことがたいせつである。

語釈と文法

◆昔—いわゆる「大昔」ではなく、「以前・過去」というほどの気持ち。

◆男—「をとこ」は、「をとめ」に対する語で、おもに若い男性をいう。この物語の諸段に登場するこの「男」は、古来、在原業平と考えられ、後世では、「昔男」というと、在原業平を指すことがある。

◆初冠—元服。成人式。当時、貴族の子弟は十二歳から十六歳の間に髪を大人ふうに改め、初めて冠をつけて成人の儀式をした。

◆しるよしして(しる(ラ四・体)・よし

(名)・して(格助)——領地をもっている縁故で。「しる」は「治める・領有する」の意。「して」は手段・方法・材料などを示す。「……デ……ヲモツテ」の意。

◆狩に往にけり(狩(名)・に(格助)・往(ナ変・用)・けり(過・終))——鷹狩りに行った。文法参照

◆なまめいたる(なまめい(カ四・用(イ)・たる(完・体))——上品で優美な様子をしている。口語の「なまめかしい」は「つやっぱい・色っぱい」などとお色気を感じさせる語だが、「なまめく」は若々しく高貴な感じの美しさをいう。

◆女はらから(名)——一語で、「姉妹」の意。「はらから」は同じ母親から生まれた「きょうだい」をいう。

◆かいま見てけり(かいま見(マ上・用)・て(完・用)・けり(過・終))——もの隙間から、こっそりのぞき見をした。「かいま見る」は「垣間見る」などと書き、「かい」は「かき」のイ音便とする。「て」は完了「つ」の連用形である点に注意。

◆おもほえず(おもほえ(ヤ下・米)・ず(消・用))——思いがけなくも。意外にも。次の「ふるさとに……ありければ」を

修飾する。「心地惑ひにけり」にかかるのではない。つまり、今やさびれている「ふるさと」(旧都)にこんなすばらしい女性がいたことを、意外に思ったのである。なお、「おもほゆ」は、「おもはゆ↓おもほゆ↓おもほゆ」と変化する。「ゆ」はもともと上代の自発の意の助動詞。

ふるさと

古文では、①旧都。②古くからなじみの土地。たびたび訪れた所。③住みなれた所・もとの住家などの意が多い。④生まれ故郷の意に用いることは比較的新しい。京都に都がある時代からすれば、奈良は「ふるさと」(①)になるのである。

はしたなくて

(はしたなく(形・用)・て(接助))―似合わしくない状態で。さびれた旧都奈良に著々しい美しい女性がいることが不調和なのである。「はしたなし」は、「中途半端である」「どっちつかずだ」「しっくりしない」などが原義。このほか、②きまりが悪い。体裁が悪い。③激しい。ひどい。などの意もある。口語の「憤みがない・下品だ」の意味にとつてはいけない。

◇惑ひにけり(惑ひ(ハ四・用)・に(完)・

用)・けり(過・終)―心が乱れてしまつた。

◇男の―「男」だけを主語にし、「の」のない本に従うのがよからう。

◇狩衣―もと狩猟に用いた衣服であるが、平安時代初期のころから貴族の平常服として用いられた。えりが丸く、袖口にくくり緒をつけ、締めくくるようにできている。狩衣を着るときは、烏帽子をかぶり、指貫袴をはく。二四八ページ参照。また、和歌用語として「かりごろも」があるが、意味は同じ。

◇歌を書きてやる―「やる」は「贈る」の意。狩衣の裾に歌を書いてやったようにとれるが、狩衣の切れ端には歌は書けない。歌は紙に書いて、それを狩衣の裾に添えて贈つたのである。当時は歌を贈るのに、木の枝や花などに添えてやるのが習慣であった。一六二ページ参照。

◇信夫摺り(名)―忍草を布に摺りつけて模様としたもの。その模様が「もぢり模様(乱れ模様)」であるので、「しのぶもぢり」ともいう。陸奥国信夫郡(福島県)から多く産した。

◇春日野の……の歌―紫草の根から、

当時高貴な色とされた紫色の染料を作つた。「若紫」は若い紫草の意であるが、それを若く美しい姉妹になぞらえた(八二ページ参照)。さらに信夫摺りの原料に使う関係で「しのぶの乱れ」つまり「信夫摺りの乱れ模様」と続けて、「忍ぶ恋の心の乱れ」の意をもたせた。「限り知られず」「限り(名)・知ら(ラ四・末)・れ(可)・末。ず(消)・終」は、その心の乱れがきわめてはなはだしいことをいっている。「春日野の若紫の摺り衣」は、「しのぶの乱れ」の序詞で、自分の衣服など、その場にあるものを巧みに利用した序詞。「その男、信夫摺りの狩衣をなむ着たりける」はその間の事情を説明することばになっている。

◇追ひつきて(追ひつき(カ四・用)・て(接助))―(女を見るや)すぐに。間をおかずに、の意。ここは「老い、うきて」となっている本もあり、その場合は、「経験をつんだ大人みたいに・ませた口調で」などの意となる。そのほうが、元服して大人の仲間入りをしたこの若者の、一つの自覚がみられておもしろい。

◇ついでおもしろきこと(ついで(名)・おもしろき(形・体)・こと(名))―い

かにもその場にふさわしい、趣のあるやり方。「状況がいかに歌を詠んで贈るのにふさわしい雰囲気であったこと」の意。「ついで」は「その場」「その折」。「おもしろし」は「趣がある」の意。

◇ともや思ひけむ(と(格助)・も(係助)・や(係助(係))・思ひ(ハ四・用)・けむ(過推)・体(結))―とても思ったのであるうか。「ついでおもしろき」から文末までは、まず「春日野の……」の歌を詠み贈つた男の心中を物語作者が推測し、さらに物語全体に対する解説を加えたものである。

◇「みちのくの……」の歌―この歌は河原左大臣と呼ばれた源融の歌で、『古今集』巻十四(恋四)に第四句が「乱れむと思ふ」(心ヲ乱ソウトスル)という形で出ている(伊勢物語)と同じ形で『小倉百人一首』にも載る。「みちのくのしのぶもぢり」という関係で、比喩的な序詞。源融は嵯峨天皇の第十二皇子。臣籍に下って源の姓を賜わる。従一位左大臣まで昇り、鴨川べりの東六条に豪華な河原院を営んだ。業平とは同時代の人。

◇乱れそめにし……―乱れはじめた私で

はないのに。つまり、あなたゆえに私の心はちちに乱れはじめたのですよの意。「なく」は打消の助動詞「ず」の古い未然形「な」(奈良時代の活用形で、平安時代は一般には用いない)に、準体助詞「く」のついた形、「ぬこと」の意。「いふといはく」「思ふと思はく」などと同じ。「に」は逆接の接続助詞で「……ノニ」の意。

◇心ばへ(名)―心持ち。ここは「歌の趣・歌の意味」の意。あとの「なり」は断定の助動詞の終止形。

◇いちはやき(形・体)―激しい。熱烈な。ここを「すばやい」の意味にとり、「その場その折をとらえてすばやく機知をはたらかすこと」と解する説もある。

みやび

風流。「宮ぶ」(宮廷風である。風雅である)という上二段活用。の動詞から生じた名詞。「みやぶ」の反対語には「懼ぶ・鄙ぶ」(田舎風である)がある。

文法の要点

◇往にけり―「往に」はナ変動詞の連用形であるが、ナ変動詞は、「死ぬ」「往(去)ぬ」の二語であることを覚えておこう。「けり」は用例からみると、①それが過去の事がらだ

ということを示す(……シタ・ソレハ……デアッタ)。②伝聞した過去のことを示す(……デアッタツイウコトダ……デアッタソウダ)。③そうであったことに気づいて詠嘆する(……タコトヨ)、に用いられることが多い。同じ過去でも和歌は自分の直接経験したことをいうのが普通で、その場合は「き」を用い、伝聞過去の「けり」(②)を用いることはめったにない。したがって、和歌で用いる「けり」は詠嘆(③)の場合が多い。「き」「経験過去」「けり」伝聞過去・詠嘆の区別は注意が必要。

◇てけり―「て」は「了」「つ」の連用形。「つ」は「て・て・つ・つる・つれ・てよ」と下行二段型に活用し、その未然形・連用形の「て」は接続助詞の「て」とまぎれやすい。助動詞の場合は、「てば・てむ・てまし」「てき・てけり・てけむ」という形を覚えておいて、前の三つの場合がその未然形、あとの三つの場合が連用形、そして、それ以外の場合は接続助詞の「て」と判定する。また、「む」「まし」「き」「けり」「けむ」が活用して、「てめ」「てまし」「てし」「てしか」「てける」「てけれ」「てけめ」のようになる場合もあることはい